

## 教育研究業績書

令和5年5月1日

氏名 荒井 眞一 

## 教育上の能力に関する事項

事項	年月	概要
1 教育方法の実践例	平成22年4月～	教育実習講義における学生による模擬授業の様様をデジタルビデオカメラで撮影し、授業担当学生にDVDを配布するとともに、翌週の講義で撮影した動画を講義の場で映写し全学生と授業内容の改善点について話し合いを行った。この結果、板書の方法や、声の出し方、机間巡視、授業の時間配分といった点における改善点を受講学生全員で共有することが可能となった。
2 作成した教科書・教材	平成23年3月	栄養教諭養成に関係する基本的事項を整理し、栄養教諭採用試験受験学生用に専門職に向けた内容を体系化した冊子を作製した。基本的な事項をまとめた基本編と重要事項の課題と定着を図るための問題編の2部構成からなる教材としてこの冊子を活用させた。
3 教育上の能力に関する大学等の評価	平成30年3月	心理学部設置に伴う課程認定において教育課程論の単独担当可と判定された（札幌学院大学）。
4 実務の経験を有する者についての特記事項	平成24年5月～ 26年5月	全国私立大学教職課程研究連絡協議会北海道地区理事
5 その他	平成26年4月	取得可能な教員免許のすべてに対して、卒業要件を満たしながら教職科目の単位履修を円滑に行うための方法について解説した冊子（『平成26年度版 教職課程履修の手引き』）を改訂作成した。これら小冊子の内容を基礎にオリエンテーションを実施し、全ての教職履修学生に単位取得の方法を理解させた。

## 職務上の実績に関する事項

事項	年月	概要
1 資格、免許		特記事項なし
2 学校現場等での実務経験		特記事項なし
3 実務の経験を有する者についての特記事項	平成26年10月～	北海道札幌啓成高等学校における進路ガイダンス講話会に教職課程担当として参加
4 その他	平成24年4月	歴史教育者協議会分科会世話人

様式第4号 (教員個人に関する書類)

担当授業科目に関する研究業績等						
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数 (総ページ数)	概要
教育原理	(学術論文等) 1. 「ルソーとスミスを軸とした『教育原論』の授業」	単	平成 21年3 月	『天使大学紀要』第9巻	16	天使大学講義「教育原論」において、教育実践の根本をなす事柄について、『エミール』(ルソー)と『道徳感情論』(スミス)の講読を軸として、学生とともに考察した。『エミール』の講読においては、教育に際しては人間が本来もつ自然性を育てることの重要性について述べた。『道徳感情論』の講読においては、「同感」という語をキーワードとして、人間のもつ共同体性の根源を示した。
	2. 「歴史教育における『生産関係』の位置づけ—教科編成の基礎的原理としての社会的道徳性—」	単	平成 24年3 月	『北海道文科大学論集』第13号	14	1970年代を中心に歴史教育で唱えられた「生産力と生産関係」の内容や意義について検討した。内田義彦によれば、「生産関係」が「階級闘争」という形で表れるのは一定の過程を経た上でのものである。その以前に形成された社会的な道徳性が無くては成し遂げられないことである。当該論文では内田の記述に依拠し、教科編成の基礎的原理となる社会的な道徳性が形成される過程に関する教育内容を提言した。
	3. 「科学的な社会認識の内容に関する基礎的考察」	単	平成 31年3 月	『札幌大谷大学紀要』第49号	6	科学的な社会認識の内容について教育的に明らかにするための基礎的作業として、高村泰雄と内田義彦による文献について検討・考察した。科学的な社会認識を考察するに際しては、一定な状況下に置かれた人間がとりうる行動の基礎を十分に認識した上で学問的な方法をもってそれら状況下における人間の行動の帰結するところを理解することが不可欠となることが明らかとなった。
	4. 「1970年代『学力』論争にみる『総合的な学習』の理論的基礎—広岡亮蔵『三層説』を起点として—」	共	令和3 年3月	『札幌大谷大学社会学部論集』第9号	11(22)	「総合的な学習」の理論的基礎をなす事柄について、その起源となった事柄の一端を明らかにすることを試みた。この目的を達成するために、現行のものも含めた学習指導要領における記述を考察の対象とした。この考察の後、学習指導要領から抽出される理論的記述に基礎を与えていると思われる、広岡亮蔵によって1950年から70年代に唱えられた「三層説」について検討した。共著者：荒井眞一・村田尋如。第1,2章 pp.92~102を荒井が執筆
	5. 「社会における共同体性の根本原理と	共	令和4 年3月	『愛知教育大学家政教育講座研究	9(10)	アダム・スミス『道徳感情論』における「同感(共感)」に関する記述を検討し、それらを「教育原理」の授業に取り入れ

様式第4号（教員個人に関する書類）

	<p>しての『同感』 —アダム・スミス『道徳感情論』の記述から—</p> <p>6. 「教育実践における『普遍的視点』に関する理論的提言—上原専禄による『民族の独立』を基礎として—</p> <p>7. 「学問研究成果を踏まえた教科教育の目的論構築へ向けて—歴史教育実践史におけるアダム・スミス理論の位置づけ—</p> <p>8. 「近代教育思想の成立を中核に据えた『教育原理』の授業構成—ルソーの教育思想への道筋を明らかにすることをねらいとして—</p>	<p>共</p> <p>共</p> <p>共</p>	<p>令和5年3月</p> <p>令和5年3月</p> <p>令和5年3月</p>	<p>『愛知教育大学研究報告』第72輯</p> <p>『愛知教育大学家政教育講座研究紀要』第52号</p> <p>『愛知教育大学家政教育講座研究紀要』第52号</p>	<p>4(6)</p> <p>10(12)</p> <p>11(12)</p>	<p>学生たちに示すまでの一連の過程についてまとめた。授業では「同感（共感）」の内容がいくつかに分けられ、それらの一つ一つが日常的な行動の原則となっていること、そしてそれらの内容を基礎にして社会科学としての経済学が誕生したことについて述べた。共著者：荒井眞一、青木香保里。第1から3章 pp. 37～45 を荒井が執筆</p> <p>学習指導要領の記述の中にいくつかの教育実践を通して得られた普遍的視点との記述がみられた。歴史教育という分野で普遍的視点に相当する提言を行った上原専禄の論稿について検討した。上原の記述からは、現代における主体的学びや教育の目的に相当する内容が導き出されていることが確認された。共著者：荒井眞一、青木香保里。第2から4章 pp. 76～79 を荒井が執筆</p> <p>学問研究成果を踏まえた目的論の構築へ向けて、アダム・スミスによる論を足場とした考察を試みた。スミスによる「同感」をよりどころとして教育内容の構成を試みることによって、道徳哲学の述べるところをふまえた目的論の構築が可能となることが示唆された。共著者：荒井眞一、青木香保里。第2から4章 pp. 51～60 を荒井が執筆</p> <p>教職課程講義である教育原理の中核的な内容としてルソーの教育思想があげられる。ルソーの思想が広がる前の段階として、近代市民社会における啓蒙思想の広がりが見られた。当該講義では、近代市民社会の発展からルソーの教育思想へと至る歴史的な経過に沿って講義配列を行いその成果について検討した。共著者：荒井眞一、青木香保里。第2から4章 pp. 62～72 を荒井が執筆</p>
<p>教職概論</p>	<p>(学術論文等)</p> <p>1. 「教育諸制度の基盤としての教育基本法の位置づけとその把握」</p> <p>2. 「教職課程科目で示されるべき公教育</p>	<p>単</p> <p>共</p>	<p>平成23年3月</p> <p>令和4年3月</p>	<p>『北海道文教大学紀要』第30号</p> <p>『愛知教育大学家政教育講座研究</p>	<p>16</p> <p>9(11)</p>	<p>多くの教職課程講義において理論的中核をなす教育基本法の内容とその位置づけについて、いくつかの文献記述に基づいて検討した。その検討の成果を基に作成した講義内容に対する学生による認識形成のありようについて、学生によるレポート記述を基に考察を試みた。教職課程における授業内容の在り方について様々な文献記述の検討・考察をとおして理解を深めるため、公教育の目的</p>

様式第4号 (教員個人に関する書類)

	<p>の目的 -古今の文献記述を踏まえて-</p> <p>3. 「教育実践における『普遍的視点』に関する理論的提言 -上原専禄による『民族の独立』を基礎として-</p>	共	令和5年3月	<p>『愛知教育大学研究報告』第72輯</p>	4(6)	<p>について検討した。古今の文献に共通する考えとして見受けられたのは、「社会の側からの教育」と「個人の側からの教育」という2点であった。共著者：荒井眞一、青木香保里。第2から4章 pp. 28～36を荒井が執筆 (再掲載のため、略)</p>
カリキュラム論	<p>(著書)</p> <p>1. 『学力と教育課程の創造 社会認識を育てる教育実践とそのあゆみ』</p>	共	平成25年8月	株式会社同時代社	13(175)	<p>社会科教育の分野において積み重ねられた教育実践や教育理論の蓄積とその成果について、様々な分野を選考する9名の著者による論考を集約した。これら集約の成果を踏まえて、新しい時代において求められる学力のとらえ方や、教育課程の在り方についての提言を試みた。荒井が共同編集担当。(執筆は pp. 42-54)</p>
	<p>(学術論文等)</p> <p>1. 「キャリア教育における『基礎学力』の理論的枠組み」</p>	共	平成28年3月	『札幌大谷大学社会学部論集』第4号	12(15)	<p>大学における基礎的な学力の持つ意味について、先学の説に依拠しながら考察し、現代に通ずる理論的な枠組みを導き出すことを試みた。1958年以降岡亮蔵によって述べられた「基礎学力」に関する論を検討することにより、“社会において求められる能力”というもののありようについて考察した。共著者：荒井眞一・平岡祥孝。第2および3章 pp. 2～13を荒井が執筆</p>
	<p>2. 「アクティブ・ラーニングにおける能力論とその源流」</p>	共	平成29年3月	『札幌大谷大学紀要』第47号	4(6)	<p>アクティブ・ラーニングの理論的な基礎について考察した。いくつかの記述の検討の結果、アクティブ・ラーニングという語の意味するところは幅の広いものであり、検討するに当たって留意すべきは、この語の意味するところよりこの語の背景にある能力にかんする論考であった。また、1970年代後半より、同様な実践は民間教育団体などで行われており、実践を通してどのような能力(「学力」)が培われるべきかという議論がなされていた。共著者：荒井眞一・酒井義信。第2～4章 pp. 7～100を荒井が執筆</p>
	<p>3. 「アクティブ・ラーニングの基盤となる</p>	共	平成29年3月	『北海道私立大学・短期大学教職	6(11)	<p>アクティブ・ラーニングにおける理論的な基礎をなす能力論について比較検討した。検討の結果明らかになった第1の</p>

様式第 4 号 (教員個人に関する書類)

	能力論と 1970 年代における『学力』論の比較検討			課程研究連絡協議会会報』第 36 号		点は、アクティブ・ラーニングに求められる能力は経済界などから求められている能力のあり方と軌を一にするものであるという点であった。第 2 の点は、歴史教育者協議会では実践を通してどのような能力(「学力」)が培われるべきかという議論がみられたという点であった。共著者：荒井眞一・青木香保里。第 1・2 章 pp. 9～15 を荒井が執筆 (再掲載のため、略)
	4. 「1970 年代『学力』論争にみる『総合的な学習』の理論的基礎」	共	令和 3 年 3 月	『札幌大谷大学社会学部論集』第 9 号	11 (22)	
	5. 「教育課程編成におけるカリキュラム・マネジメントの充実 ―学習指導要領における記述の検討を中心として―」	単	令和 5 年 2 月	『SGU 教師教育研究』第 37 号	5	平成 31 年度における教職課程設置大学に対する再課程認定において、各大学に対してコアカリキュラムの作成と順守が求められることとなった。教育課程に関わる講義においては「カリキュラム・マネジメントを含む」との一節が加えられた。本稿では学習指導要領の記述を基礎に、この後の意味するところとその重要性について検討を行い、教職課程における位置づけについて考察を試みた。
教育方法-技術論	(学術論文等) 1. 「経済学の研究成果にもとづいた歴史教育の内容構成にかんする研究」	単	平成 21 年 3 月	北海道大学大学院教育学研究科博士学位論文	110	「江戸時代」の経済発展についての研究成果にもとづく教育内容を構成し、授業プランおよびその実践として具体化することによって、学習者の認識形成過程を明らかにすることを試みた。「江戸時代」の経済発展過程は、17 世紀、18 世紀、19 世紀の 3 つに区分される。本論ではこの時期区分に依拠しつつ、マニュファクチュアの達成された業種として、しょうゆ醸造業に着目し授業プランの作成を行い、その結果を検討した。
	2. 「プレゼンテーションを目的としたアナログ機器の有効活用」	単	平成 23 年 6 月	札幌大谷大学短期大学部美術科一般教育研究論集第 1 号	7	iPod を利用することにより、パワーポイントなどのプレゼンテーションをアナログテレビに映し出す方法について具体的に述べた。当該論文では、筆者の担当する「教育行政論」講義における実際の使用例を示しつつ、iPod とアナログテレビとの接続の有効性について述べた。
	3. 「学生による実践的学びの実現を目指した教員養成の方法に関する研究」	単	平成 25 年 3 月	『札幌大谷大学社会学部論集』第 1 号	29	北海道では、年に一度全道各地の教員が札幌に集まり、合同教育研究会が開催される。この集會に教職科目受講者 58 名をこの集會に参加させた後、講義内で学生各々の目にした実践について報告させ受講学生全員と実践の内容について議論した。本稿では、実践的な学びを

様式第4号 (教員個人に関する書類)

	<p>4. 「アクティブ・ラーニングの方法をとり入れた社会科授業の内容構成とその方法」</p> <p>5. 「アクティブ・ラーニングにおける能力論とその源流」</p> <p>6. 「アクティブ・ラーニングの基盤となる能力論と1970年代『学力』論の比較検討」</p> <p>7. 「教職課程における情報通信技術の位置づけとその変遷」</p> <p>8. 「主体的で深い学びの実現を目指した教職課程におけるポータルサイトシステムの利用-社会科教育法実践から-」</p>	<p>単</p> <p>共</p> <p>共</p> <p>共</p> <p>単</p>	<p>平成26年3月</p> <p>平成29年3月</p> <p>平成29年3月</p> <p>令和4年2月</p> <p>令和4年3月</p>	<p>『札幌大谷大学社会学部論集』第2号</p> <p>『札幌大谷大学紀要』第47号</p> <p>『北海道私立大学・短期大学教職課程研究連絡協議会会報』第36号</p> <p>『北海学園大学教職課程年報』第14号</p> <p>『北海道私立大学・短期大学教職課程研究連絡協議会会報』第40号</p>	<p>17</p> <p>4(6)</p> <p>6(11)</p> <p>9(12)</p> <p>14</p>	<p>経た学生との認識形成のありようについて、一般性を導き出すことを目的として、教育研究集会への学生参加報告資料を主たる材料として検討を行った。</p> <p>アクティブ・ラーニング特集の1つとして、学科特性を踏まえたアクティブ・ラーニングの社会科教育における内容について考察し、その成果を実践の経過を検討することにより検証した。この検討を踏まえ、学科の理念を有効に生かす社会科教育の内容構成について考察した。 (再掲載のため、略)</p> <p>(再掲載のため、略)</p> <p>2021年4月に「情報通信技術を活用した教育に関する理論及び方法(仮称)」の1単位以上の開設が義務化された。本稿では、この開設に至る教職課程における情報通信技術の位置づけについて、その変遷を明らかにすることを試みた。共著者：荒井真一、丸山宏昌、五十嵐素子。第2から4章 pp. 6~14 を荒井が執筆</p> <p>動画配信という遠隔授業の中で受講学生との活発な意見交換を行うための方法論について実践しその成果について検討した。学制とのポータルサイト上のやり取りを踏まえて学生たちから質問を募り、最終的には専門研究者の力添えをもらい学生たちの疑問に根本から答えることにより主体的で深い学びの実現を目指した。</p>
<p>教育学 教職実践 演習 事前・事後指導 教師技術 演習 教職演習</p>						